

# 希少猛禽類の生息地における施業方法について

十勝総合振興局森林室森林整備課 井上 昂

## 取組の背景・目的

十勝にはクマタカやオオタカなどの希少猛禽類が生息しており、道有林における生物多様性保全の観点から、繁殖や生育に悪影響を及ぼさない範囲で施業時期や方法を調整する必要があります。

当森林室では、専門家からの助言や指導、過去の文献等を基に、2013年に「道有林十勝管理区におけるクマタカ・オオタカ営巣地等の森林施業の手引き」(以下「手引き」と言う)を独自に作成し、この手引きに基づいて森林施業を行ってきました。

そうしたこれまでの取組状況を紹介しますとともに、問題点と今後の方向性について考察したので報告します。

## 取組の内容・成果

### 1. 猛禽類の生活環(ライフサイクル)と森林施業について(図1)

クマタカには決まった生活環があり(オオタカもほぼ同様)、各時期によって森林施業が与える影響の度合いも異なってきます。

その中でも特に伐採作業は年間を通して実施され、かつ猛禽類の生息環境へ与える影響も大きいと考えられることから、この伐採の実施時期の判断が、猛禽類に配慮した施業を行う上で重要です。

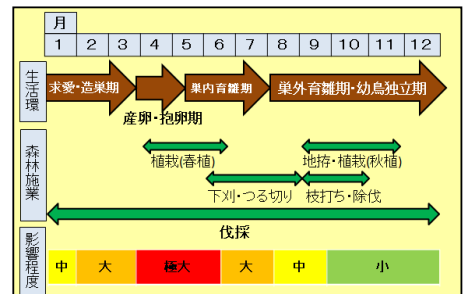


図1 クマタカの生活環と森林施業

### 2. 猛禽類の行動圏等に応じた森林施業方法(図2)

手引きでは、クマタカの行動圏(営巣期に利用される止まり場所や採餌場所、飛行ルートなど、営巣木を含んだ利用区域)に応じた人工林の伐採方法を決めています。特に営巣中心域である配慮区域では当年繁殖利用があるか否かで伐採の可否が決まります。

### 3. 繁殖有無の確認調査方法(図3)

まず産卵期・抱卵期である4月~5月に、営巣木を離れたところから双眼鏡で覗き、姿や繁殖行動の確認を行います。姿及び行動が確認できなかった場合は、今度は落葉時期前の8月~9月に巣の直接観察を行い、新しい巣材や周辺の地面に痕跡等が無いかを確認します。

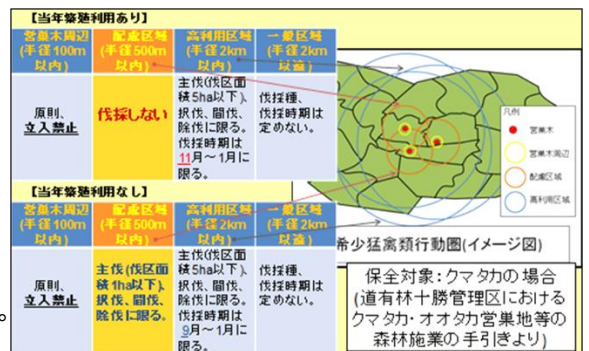


図2 クマタカの行動圏等に応じた人工林伐採方法

## 施業上の問題点と今後の対応案

こうした取組を進めることで猛禽類に配慮した施業を行ってきましたが、その一方で新たな問題点が浮き彫りになりました。

まず一つは、地の利が良く生育の良好な林分であっても、そこに営巣木があれば、今の手引きに基づいて人工林の伐採制限をかけることになり、状況によっては人工林資源循環利用の妨げになること。もう一つは、作業中新たに猛禽類の姿や営巣木などが発見された場合、急な繁殖確認調査や施業時期の再検討などで作業の手を止めてしまい、事業者の不利益が増してしまう懸念があることです。

これらに対する今後の対応案として、伐採制限に対しては、伐採による猛禽類にとっての林内環境改善についての検討を行い、手引きの内容を見直し、伐採制限を緩和することで人工林資源の循環利用の両立を図っていきたいと考えています。

また作業中の支障発生に対しては、作業中に生息が確認された時の対応をシミュレーションし、複数の対処方策パターンを提示することで事業者の不利益を可能な限り少なくしたいと考えています。また複数年に渡って繁殖利用が確認されていない営巣木の取扱いを検討することで、移り変わる生息状況に応じて施業制限の適用を見直していきたいとも考えています。

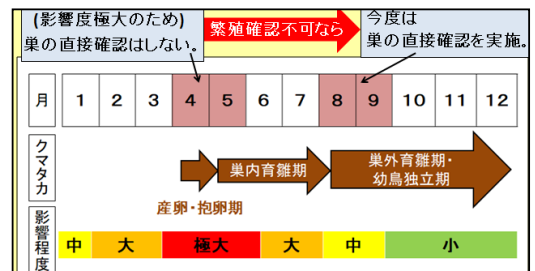


図3 繁殖有無確認調査の実施時期